

「母を一人にしたくない思いで在宅療養を決意」

一人暮らしの母の家に同居して、心穏やかに最後を看取りました。

【散歩中に倒れた母】

散歩が好きだった母。その日も母と私は一緒に歩いていたところ、突然母が倒れました。急いで救急車を呼んで病院へ向かい、原因を調べるために検査入院することになりました。一週間の入院です。

母はさみしがり屋でしたし、私も母のことが気になり、朝夕、仕事の合間に様子を見に行きました。母は患者、私は見舞人という関係に疑問を持ちながら、回診に来られた先生方にも、訊きたいことなど何も言えませんでした。

【胃がんと判明】

検査の結果、胃がんが見つかりました。母は87歳で、高齢であるため手術はしないことを家族で決めました。病院の先生からは「積極的治療をしないということであれば、緩和ケア病院を紹介するので」と転院を勧められました。

私は、緩和ケア病院というのはどこにあるのか、どのようなことをしていただけるのか調べていたのですが、そんな様子を見て、娘が「お母さんを見ていると、家で介護した方が気持ちが落ち着くんじゃないの」と心配してくれました。

【在宅療養を決意】

娘の言葉がきっかけで、母の自宅での療養を考えるようになりました。設備が整って、医師も常勤されている病院の方がいいのではないかと、いろいろと考えましたが、いつも母がそばにいることを重視して、在宅療養を決めました。

病院の先生にそのことを告げると、「在宅医療をされている先生を見つけてください」と言われました。すぐに、母が通院していたクリニックに相談すると、中央区で在宅医療をされている先生を教えてくださいました。

【関係者間の連携】

早速、在宅医の先生に連絡を取り、お願いしましたところ、先生は「安心して安全に過ごしていただけるよう24時間365日サポートします。全力でお手伝いさせていただきます」と言ってくださいました。とても嬉しく心強かったです。

病院の先生に報告すると、関係者が集まるカンファレンスの日を決めてくださいました。病院の医師、看護師などの院内スタッフと在宅医、訪問看護師、ケアマネージャーの方々が、医療の内容やこれからの生活に必要なことなどについて、情報を共有、引継ぎして、退院後、在宅療養への移行に向けて、母のために話し合ってくださいました。私は、先生方の姿を見て感謝の気持ちでいっぱいになりました。

【母の自宅へ】

引継ぎが終わると、家に帰れるのですが、母は血液中の酸素が不足して不安定だったので、様子を見て寝台車で帰宅することになりました。自宅にはこれから診てくださる先生と訪問看護師さん2人が迎えてくださいました。

母をベッドに寝かせつけると、母は部屋を見回して嬉しそうにしていました。先生は容体を診て、「安定しています。家に帰れて安心されたのでしょうか」と言ってくださいました。安心したのは私も同じでした。

【心強かった在宅医、訪問看護師】

在宅医の先生は「やってあげたいことなど何でも言ってください」とおっしゃり、どんな些細なことでもメールで質問すると、すぐに返事をくださいました。今までの不安はなくなり、やっていけると確信しました。

訪問看護師さんは、点滴、身体ケア、口腔ケア、洗髪、排便、体位変換など、母に様々なお世話をしてくださり、私たち家族も支えていただきました。看護師は病院では大勢のうちの一人居ますが、在宅療養では一人の方をずっと見ていけるので訪問看護師を選ばれたと伺いました。まさに私たちにとって白衣の天使でした。

【母との日々、そして最後】

夜は母といっしょに過ごしました。母の好きな歌を歌ったり、昔話をしたり、今となっては大切な思い出です。

先生に「あと2、3日です」と言われた2日後にその日が来ました。母のベッドの周りを家族で囲みました。先生から息がパクパクして顎が前に出てくると聴いていたとおりのことが現実となり、やがて静かに息を引き取りました。

【在宅療養への満足感、関係者に感謝】

私たちは心穏やかでした。悲しいんですが、これで良かったという安堵感に包まれていました。病院で亡くなった父とは違った看取りができて満足しています。

母に関わってくださった全ての方々に感謝しております。ありがとうございました。また、支えてくれた家族にありがとう。

在宅療養ができる環境があるなら、実行されたらいいと私は思います。